



牛久保小だより



～共に生きる たくましく生きる かがやいて生きる 牛久保の子～

横浜市立牛久保小学校 912-5700・5775 <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/ushikubo/>

ノーサイドの精神

「ノーサイド。」(ラグビーの以前の試合終了の合図)

今まさにラグビーワールドカップがフランスで開催されています。「ノーサイド」という言葉は、小説「ノーサイド・ゲーム」(作・池井戸 潤)が前回のワールドカップの年にドラマにもなり、ご存じの方も多と思います。ラグビーはボールをゴールまで運ぶときにどうしても人と人がぶつかり合う競技です。生で観戦していると、鍛え抜かれた体の選手同士がぶつかり合うバシッという音で思わず「大丈夫かしら。」と心配でドキドキはらはらするほどです。ですから、試合が終わるとほっとします。そんな試合終了を表す「ノーサイド」という言葉には清々しさを感じます。最近では、ラグビーの試合終了を「フルタイム (FULL TIME)」と言い、「ノーサイド」という言い方が通用するのは日本だけだそうです。

「ノーサイド (NO SIDE)」という言葉の意味は、岩波書店の「広辞苑」では「(敵味方がなくなるの意) ラグビーで試合終了のこと」、講談社の「日本語大辞典」では「(敵味方なしの意) ラグビーで試合終了のこと」と書かれています。ラグビーはイギリス発祥のスポーツで、試合終了後、敵味方なく (NO SIDE)、審判、関係者混じって親睦会をすることが慣例だったそうです。日本では、「この敵味方関係なくお互いの健闘を称える」ことに感動する人が多かったのか、ラグビー以外の様々な場面でも、その意味を「ノーサイド」という言葉に込めるようになったようです。

ラグビーは、タックル、スクラムなど実際に体をぶつける競技です。少しでも危ない場合は審判が注意します。特にスクラムは敵味方の呼吸が合わないとすぐに壊れてしまい、やり直しになってしまいます。相手を信じていなければお互いが全力でぶつかっていくスクラムは成立しません。

日本でしか通用しない「ノーサイド」。友達関係で、「ノーサイド＝敵味方なし」の境地は、「お互いが相手を信じているか。」が大事になってくると思います。お互いを信じていなければ、タックルやスクラムはとても危険な行為です。最近、学校では、人と人がかかわる機会が増えました。それはとてもよいことですが、どうしてもぶつかってしまうことがあります。それでも、互いを信じ、最後は、「ノーサイド。」と爽やかな気持ちで終われるようにしたいものです。

今年度も半年経ち、子どもたちが互いを信じ合い、「ノーサイド」という清々しい気持ちになれるようなかかわり合いを大事にしていきたいです。後期も始まります。引き続き、保護者、地域の皆様、ご支援ご協力をお願いいたします。